広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日・韓両言語における複合動詞の格の対照考察
Author(s)	李, 暻洙
Citation	ニダバ , 24 : 123 - 132
Issue Date	1995-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047963
Right	
Relation	

論　文

日・韓両言語における複合動詞の格の対照考察

李　　暻　洙

0．はじめに

現代日本語の動詞と動詞の結合表現を形態的側面の中で取り扱うとき、大きく二つの視点から捉えることができる。一つは、動詞と動詞との組合せのとき、「前項動詞の連用形」と「終止形後項動詞」との組合せ（例、歌いあげる）がある。もう一つは、動詞と動詞との組合せのとき、「前項動詞のテ形」と「終止形後項動詞」との結合表現（例、見てしまう）がある。このように動詞の結合表現には二通りあるが、前者の観点の捉え方は複合動詞、後者の捉え方は補助動詞である。その中で、複数の動詞の結合によって、ある動作・状態を表す表現とも言える複合動詞を中心に研究を進めていく。複合動詞の中でも、複合動詞の「格」支配にしぼり、韓国語の複合動詞とも関連づけて対照研究を行いたい。

1．先行研究の検討と問題提起

山本(註1)(1984)では次のように複合動詞の格支配(註2)について述べている。

1類：複合動詞文の格成分の範囲内で前項動詞と後項動詞のいずれもが適格文を作り出せる。（例、泣き叫ぶ、持ち帰る）

2類：格成分は前項動詞のみに対応関係を示す。（例、静まり返る、奪い返す）

3類：格成分は後項動詞のみに対応関係を示す。（例、打ち重なる、差し挟む）

4類：格成分は前項動詞とも後項動詞とも対応しない。（例、取り乱す、打ち切る）

山本(1984)では上のように複合動詞の格支配は4種類の中の一つであると説明している。しかし、基本的には上のように分けられるが、きれいに分けられない場合も意外に多くある。さらに前項後項動詞共に格支配を持ってないのは接頭辞・接尾辞であると説明している。この分類法は、複合動詞の格支配を結合価と関連させ分類しているのは、非常に合理的ではあるが、問題点は結合価を明確に分けることが可能かどうかである。例えば、「終わる」の場合は自動詞で使われた場合は、結合価1であり、他動詞で使われた場合は結合価3であるので、結合価が各々異なる。また複合動詞をどこまで接頭辞・接尾辞とすべきなのか、それに「ニ踏み切る」「ニ張り切る」も格支配能力を持っていないが、これらも接頭辞・接尾辞なのかどうか、もう少し検討が必要であると思われる。よって山本では分

類できなかったものをより細かく格（を・が・に）に分け、考察を行う。

また塚本(注3)(1993)では格支配について語彙的複合動詞と統語的複合動詞とに分け、韓国語との対照研究を行っている。格支配の分類法は基本的には山本(1984)の分類法と同様であるが、さらに発展させたのは語彙的・統語的複合動詞にわけ、韓国語の複合動詞との対応関係について説明している。その分類法は次のようである。

A－語彙的複合動詞

(1)同型両者共存タイプ（が泣く、が叫ぶ　⇨が泣き叫ぶ）

(ka-wul-ta、ka-pwulwu-ta⇨ka-wulpwucic-ta)

(2)異型両者共存タイプ(1)　（を押す、へあげる⇨へ押し上げている）

(3)異型両者共存タイプ(2)　(ka-pakkwi-ta、lo-thayena-ta ⇨lo-pakkwiethayena-ta)

(4)異型一者義務選択タイプ(その1)　（をかく、になおす⇨に書き直す　）

(5)異型一者義務選択タイプ(その2)　(ul-ssu-ta lo-kochi-ta ⇨lo-kochye ssu-ta)

B－統語的複合動詞：韓国語には、統語的複合動詞は存在しない。

塚本(1993)では日本語の語彙的複合動詞の格支配について大きく三つに分け、説明しつつ韓国語の複合動詞との対応関係についても細かく述べている。しかし、韓国語において複合動詞とは何か、どこまでを前項動詞の語幹（kochi-ta+ssu-ta⇨koch-essu-ta）と見るべきか、どこまでを前項動詞の副詞形語尾（しかし、cina-chi-ta+mek-ta⇨cina-chi-key mek-ta）に扱うべきか。さらに日本語の複合動詞(例見定める）は韓国語の補助動詞（例、poko-ceng-ha-ta)に当てはまるものが極めて多いが、これらをどのように処理すればよいのか。また塚本氏の説明では、日本語の複合動詞が韓国語の複合動詞より多く（しかし、韓国語の前項動詞のa･e、ko、ϕ＋後項動詞も含めてなのか）、韓国語の複合動詞は格支配能力は前項しか発揮されていない（しかし、日本語に対応する複合動詞のみであり、韓国語の複合動詞には後項動詞が格支配を持っているものがある。たとえば、ey-tal-lye-o-ta、ey-kel-e-ka-ta）、韓国語の複合動詞は統語的複合動詞は存在しない(しかし、cap-a-ka-ta⇨cap-hi-e-ka-taをどう説明すべきなのか）など説明している。さらに塚本(1993)は、日本語の語彙的複合動詞のみを中心に扱ったものであるため、短絡的な面がないとは言えない。語彙的複合動詞の対応可能な面だけであったため、はっきり見えてこないところがいくつかあると思われる。よって、格支配の基本な分類は山本(1984)の分類に基づいて分析を行いつつ塚本(1993)の日・韓複合動詞の対照研究をも考慮に入れ、もう少し細かく分類する。また、格支配に影響を及ぼすのは前項動詞であるか、後項動詞であるか、また韓国語との対応関係（複合動詞の可能か不可能か）についても分け、考察をし、新たな独自の分類基準及び項目を立てた。

2．複合動詞の分類及び設定基準

A語彙的複合動詞：①生産的な場合：　しきる、回る、落とす、起こす、比べる、

まくる、直す、果てる、果たす、歩く、

②限定的な場合：　ほす、遂げる、果たす、止む、続く、

B統語的複合動詞：始める、続ける。終わる、終える、

C語彙統語両型可能複合動詞：切る、尽くす、上がる、上げる、抜く、かかる、かける、出す、込む、合う、過ぎる、取る、

ＡＢＣのように分離することが可能な根拠はまず二つの動詞の間に統語的要素「れる、られる、せる、させる」の介入の可能か不可能かを第一の設定基準とした。この設定方法については影山(1984)(1993)・森山（1988）でも認めている。例えば、

(1) 門前払いを食い続けていた⇨門前払いを食わせ続けていた

(2) そう叔母は言い始めた⇨そう叔母に言われ始めた

上のような例は二つの動詞の間に統語的要素の介入が可能であるというのは一つの語彙のように固まったものではなく、結合度が自由であるということは統語的複合動詞であるということを端的に示しているといってよいだろう。もう一つは、これと類似の方法で判別できることもある。即ち、一つの動詞ではなく、二つの動詞が組み合わさったものであるということが分かる方法は分離可能か不可能かという設定方法もある。この分離可能か不可能かの判断基準は、「前項動詞」＋「後項動詞」という文から「後項動詞」の形態を除去した場合、その文が非文（意味不明な文）になるか否かにした。例えば、

(3) 京太は私の肩を軽く揺すり続けていたが（廃１３８）

(3')京太は私の肩を軽く揺すっていたが　（分離可能）

(4) 竜雄はマダムと軽口をかわし、課長を引き入れようとした（眼１０）

(4')竜雄はマダムと軽口をかわし、課長を引こうとした（？）

上の例文(3) と(3')　のように非文にならない場合は、二つの動詞の間に結合力が自由であるということである。しかし、非文(4) と(4')であった場合は分解することが出来ないほど固まりの強い語彙的複合動詞といってよいだろう。しかし、問題は語彙統語両型可能複合動詞の場合である。これは「始める、続ける、終わる、終える」のように分離可能な場合もあるし、「しきる、起こす、回る、回す」などのように分離不可能なものもある。その代表的なものが「切る」である。例えば、

(5) 三日ぐらいは何も出来ないほど疲れきってしまうのだ（道２３０）

(5')三日ぐらいは何も出来ないほど疲れてしまうのだ（分離可能）

(6) 総務課長は、毎日、課員を叱咤して、その準備に張り切っていた（坊社１５９）

(6')総務課長は、毎日、課員を叱咤して、その準備に張っていた（分離不可？）

上のように後項動詞「切る」の場合は、分離してもよい(5) (5')場合と分離すると意味不明な文(6) (6')になってしまう場合がある。このように語彙的複合動詞と統語的複合動詞が一緒に含まれている場合を語彙統語両型可能複合動詞と言ってよいだろう。このような手続きを踏む理由は、前項動詞の意味が複合動詞の意味にどれほど寄与しているかを判

断するためである。しかしこの判断基準にすべてのものがきれいに一致するものではないが、複合動詞が語彙的なのか統語的なのかを区別するのに極めて有効な方法の一つである。この設定方法以外にも具体的判断基準については李(注4)（１９９４）で詳しく論じている。

３．格支配の分類と主導権

(7) せいぜいそんな駄洒落が飛び出すくらいのものである。（道５１）
(8) 彼女は誰にも話さなかった自殺の原因を、こうして私に打ち明けた（道１３９）
(9) 女の指を切り落とした残酷さ（敦１７）
(10)自分を呼び止めたのは、その学校の学生であるのは金には一目で分かった（幸９）
(11)ギターのうまいある青年は一生懸命讃美歌を練習し始めた(道145)
(12)顔を見守りながら言った（敦５１）
(13)一つの論文を書き上げた（甘え１６）
(14)親子の姿は石段を下り切って、左折して、消え去った（潮２２１）
(15)父親の逡巡を母親の熱心な後押しが押し切ったのである（潮１２５）
(16)母親は困惑したが、一糸も乱れない見事な率直さでその場を押し切った（潮１６５）

「前項動詞＋後項動詞」の複合動詞には、例のように単独で用いられる場合と、複合された後、用いられる場合とが一致する場合(9)(10) もあるが異なる場合(7)(8)もある。また後項動詞の意味が本動詞の意味をそのまま保っている場合(11)(12)と意味が抽象化された場合(13)(14)、そして同一の複合動詞でも格支配が各々異なる場合(15)(16)とがある。よって、すべての格支配を網羅することはできないが、自他動詞として多く使われるもの「が、に、を」格を中心にその主導権が前項動詞にあるのか後項動詞にあるのか、それとも前項と後項の両支配能力にあるのか、前項・後項の格支配と全然無関係なのかを中心に調べる。それを表に纏めると以下のようになる。

表(1) 格の主導権と格の使用頻度

	ガ格	ニ格	ヲ格		合
前項動詞の格主導権	228	134	242		604
後項動詞の格主導権	182	112	317		611
前項後項の格主導権	154	43	969		1166
前項後項と無関係	83	630	93		803
合	647	919	1621		3187

表(2) 格主導権と複合動詞の分布

	語彙的	統語的	語彙統語両型		合
前項動詞の格主導権	293	84	227		604
			141	86	
後項動詞の格主導権	429	×	182		611
			182	x	
前項後項の格支配権	489	67	410		1166
			400	10	
前項後項と無関係	775	×	31		806
			24	7	
合	2186	151	850		3187

表(1) の内訳を説明すると以下のようになる。資料14点の中、ガ格(647)、ニ格(919)、ヲ格(1612)、合計3187語の中から採集したものを格主導がどこにあるかを分類・整理し、調査を行った。前項動詞が格主導を持っている場合と後項動詞が格主導を持っている場合との格（ガ、ニ、ヲ）の比率はあまり差がなかった。しかし、前項後項の格主導権の場合はヲ格(969) が圧倒的に多かった。それに比べるとニ格は僅かヲ格の五分の一しかなかった。また、前項後項動詞と無関係の場合は逆にニ格(630) が大部分であった。このように前項後項動詞が格支配を持っている場合はヲ格で、前項後項動詞の格支配と無関係の場合はニ格であるということは「打ち、引き、取り、突き、立ち、差し、…」といった接続詞での場合であった。言い換えれば、「打ち、引き、突き、立ち、差し、…」などが他動詞で使われた場合は、後項動詞も他動詞で使われた場合である。しかし、前項後項動詞の格支配と無関係の場合は「打ち、引き、取り、突き、差し、…」といった部分が何の意味も無しに修飾しているか強調しているかが大部分であった。次は表(2) を考察する。

表(2) から次の三点を指摘することができる。

①今回の資料では、「ニ」「ガ」「ヲ」格以外は取り上げていない。一方、後項動詞の格支配の場合と無関係の格支配では統語的複合動詞は存在していない。また語彙統語両型可能の場合でも統語的複合動詞は一つも見られない。

②語彙的複合動詞では、前項動詞の格支配、後項動詞の格支配、前項後項両型格支配、前項後項動詞と無関係で圧倒的に多く現れている。言い換えれば、語彙的複合動詞は格支配の制限がない。しかし、統語的複合動詞の場合ははっきり見られ、また語彙統語両型可能の場合でも統語的複合動詞には格支配の制限がある。

③格支配と無関係の場合はすべてが語彙的複合動詞であった。この場合単純動詞（取り締まる）と複合動詞（踏み切る）との境目の至難なものが大部分であった。これらを複合動詞として扱うべきか単純動詞として扱うべきかは未だに問題に残る。表(2) で分かるように格主導権と複合動詞の分布は語彙的複合動詞と統語的複合動詞と語彙統語両型可能複合動詞は各々性質が異なるということが分かる。

3．1．前項動詞が格支配能力を持っている場合

(17)あの冷たい北風の季節風が吹き始めてきた（廃７１）

(18)夜が明け切ったときは、留守部隊も帰還部隊も大部分の者が戦闘配置についていた（敦１５９）

(19)細い体で悲しさに耐えかねているように（廃９１）

(20)よそのテントを訪問し合った（窓９３）

前項動詞によって格が支配されるのは例(17)のように統語的複合動詞（ガ咲き始める）

の大部分がこれに当たる。それに例(18)のように語彙・統語両型複合動詞の場合は、例(18)のように後項動詞の意味が抽象化された場合はガ格をとり、統語的複合動詞（ガ明け切る）である。後項動詞「切る」は統語的機能の格支配権を持ってない。しかし意味的機能は持っている。その意味的機能も本来の動詞のそのままの意味ではなく、抽象化された「完全に」といった意味である。このように前項動詞を修飾したり、強調したりしている意味的機能しか持ってないといってよいだろう。また、後項動詞が本動詞の意味そのまま保っている場合は、ニ格をとりながら語彙的複合動詞（ニ送り出す）になる。しかし、前項動詞によって格が支配される中で「始める、続ける、終わる、終える」のような統語的複合動詞（ガ咲き始めた）は後項動詞が本動詞の意味（咲くことが始めた）をそのまま保っている。

３．２．後項動詞が格支配能力を持っている場合

(21)若い行員は、堀口と関野を応接室に引き入れた（眼２１）

(22)田村は体を乗り出した（眼１００）

上の例(22)のように前項動詞「ニ乗る」と後項動詞「ヲ出す」が結合後、「ヲ乗り出す」のように「ヲ」格をとる場合は、前項か後項か一方が強い格を要求する時である。「ニ」格の場合も「ヲ」格と同様である。例えば、例(21)の「ニ引き入れた」の場合は前項動詞の「ヲ引く」と後項動詞「ニ入れた」の中でも「ニ入れた」の意味が「ヲひく」より強い意味を持っているので「ニ引き入れた」になったと思われる。このように後項動詞によって格が決められるのは、ほとんどが語彙的複合動詞である。語彙統語の両型の複合動詞が入っていても語彙的複合動詞の場合である。

３．３．前項・後項共に格支配能力を持っている場合

(23)課長が、つと立ち上がった（眼１３）

(24)この現場に居合わせたことを心から幸福に思った（窓８５）

(25)応接室を使い得たか（眼３１）

(26)毎日爆弾を落とし始めた（窓２８６）

前項動詞と後項動詞が共通に最も多くとる格は「ヲ」格である。上の(26)で前項動詞「落とす」と「始める」他動詞なので、同じ「ヲ」格を取ることができ、結合後も、「ヲ」格をとることができる。これと同じように例(23)の前項動詞が「ガ立つ」と「ガ上がる」が自動詞の場合は結合後にも要求される格は「ガ立ち上がる」である。このように前項動詞と後項動詞共に同じ格が現れてくるのは前項動詞と後項動詞の独立性が強く現れ、「を」格を多く要求しているのが多い。さらに強い対等の意味をもっている場合である。前項動詞と後項動とともに中心語を持っている場合にも現れやすい。

３．４．前項・後項と格支配と無関係の場合

(27)もし政府がある時点で核武装に踏み切る決意をすれば世論は分裂する（天人１４９）

(28)夫人を充ち足りているような女に見せていた（廃１０３）

(29)ベエトが前の主人の足元にまわりついていた（廃１０２）

前項動詞・後項動詞の格と複合動詞の格支配が無関係の場合は、最も処理し難いものである。例(27)のように前項動詞（ヲ踏む）と後項動詞（ヲ切る）の元来くるべき（ヲ）格と、複合動詞後（に踏み切る）の格が異なる場合は、前項動詞と後項動詞がひとかたまりに使われた場合である。また、複合後の意味も一方の強いほうに融合された意味とか中心の意味がどっちにあるのか分からない場合である。また「叩き起す、作り上げる、押し寄せる、引っかかる、満ち足りる」などは普通の辞書にも単純動詞のように出てくるので複合動詞として使うべきか単純動詞として使うべきかなど曖昧な動詞が多くある。ここでの特徴は「ニ」格を要求するのが最も多い。その理由は前項・後項の複合動詞が格主導権に何の影響も及ぼさないからである。

４．格主導権と残るいくつかの問題点

①同じ複合動詞でも文によって格が異なる場合

(30)母親の熱心な後押しが押し切ったのである（潮１２５）

(31)見事な率直さでその場を押し切った（潮１６５）

(32)京太はセーターに着替えると（廃９３）

(33)服を着替えて町に出て行った（廃８５）

例(30)(31)の「押し切る」の場合同一の複合動詞でも文脈によって「ガ」格か「ヲ」格がくる。また(32)(33)の場合の「着替える」も文脈によって「ニ」格か「ヲ」格がくる。

②複合動詞の可能形でも「ヲ」格をとる場合

(34)依頼を断ち切れなかった（廃１８）

(35)税を払い切れずに物納になる（天人２６０）

(36)自分を支えきれなくなってだらりと垂れていた（黒２０２）

「酒を飲む」のように他動詞が可能形になるときは、「ヲ」格が「ガ」格に変わるのが原則であるが、変わらずそのまま「ヲ」格をとるのが(34)(35)(36)の後項動詞「切る」の場合である。

③「終わる」のように「ガ」格をとる自動詞と、「ヲ」格をとる他動詞の場合は、複合された語が他動詞で使われたか、自動詞で使われたかなど曖昧な場合もある。

(37)男の話が終わりかけた頃には（風６１）

(38)みんなが歌い終わると（窓２３１）

上のように格支配と関連される問題について①から③まで述べてみた。これらの問題の整合性を説明するにはより多くの用例と緻密な検討が要求される。今回は筆者の能力不足

で問題提起に留まる。これまでの理論で説明できなかったことは深層格まで広げる必要があると思われる。これについては今後の研究課題にしたい。

5．格支配と韓国語への対応関係

5．1．格の分類と韓国語との対照

表(3) 韓国語への対応関係

	前項+後項	後項+前項	副詞+前項	漢語hata	受身・使役	その他	合
語彙	1226	327	107	262	13	251	2186
統語	13	x	138	x	x	x	151
語彙	437	153	87	16	x	6	1754
統語	5	x	91	x	x	x	96

表(4) 格の韓国語との対応関係

	語彙	統語	語彙統語
前項動詞の主導権	293(0)	84(0)	227(141:0) (86:3)
後項動詞の主導権	429(13)	0(0)	182(182:4) (0:0)
前項後項の主導権	689(6)	67(0)	410(400:0) (10:0)
前項後項と無関係	775(27)	0(0)	31 (31:9) (0:0)

( ) の数は韓国語の格と不対応の場合

表(3) の日本語の複合動詞の表現は韓国語への対応は様々な形で現れた。例えば、「前項＋後項」の場合は「書き込む:sse-neh-ta 」に、「後項＋前項」の場合は「書き直す:koche-ssu-ta 」に、「副詞＋前項」の場合は「暮れはてる」は「wancenghi 暮れる」に、「漢語hata」の場合は「切り詰める」は「節約hata」に、受身・使役の場合は「擦れ合う：bwu-dichi-ta、はねのける：panpal-siki-ta」など対応する形で現れる。このように語彙的複合動詞は一致する部分が数多くあったが、統語的複合動詞は対応する部分ががわずか(13)しかなかった。これは統語的複合動詞は統語的性質を持っているので韓国語への対応は不可能の形にあらわれているといってよいだろう。また統語的複合動詞の後項動詞が「副詞」の形で現れたのは後項動詞が前項動詞を修飾したり、強調したりしているからである。また語彙統語両型可能の複合動詞の場合は後項動詞が本動詞の意味そのまま持っているか抽象化しているかによって区別も可能であった。これらも語彙的複合動詞と統語的複合と同じように対応の形が見られる。次は表(4) の格の対応関係を調べると以下のように纏められる。

①対応する統語的複合動詞は格の対応はきれいに一致している。しかし、語彙統語両型可能の場合は対応しないものが三つあった。その中で一つは、ニ格の「耐えかねる」がヲ格の「ul-cham-ki-elyp-ta」に対応している場合である。

②日本語の格全体(3187)の中から僅か(62)だけ不一致でそれ以外はすべてが一致していた。しかし、不一致の大部分は「ニ」格であり、それも前項後項の格の主導権と無関係の「

ニ」格がほとんどであった。

以上で日本語の複合動詞の格主導権を四つに分けることができたが、これに対応する韓国語への格及び複合動詞は様々であった。それに対応する韓国語の格支配の能力は前項動詞であったが、韓国語の複合動詞の観点から考えるとまた興味深い現象が出てくる可能性が高いと考えられる。

5．2．格支配において韓国語との対照

一致する格支配

(39)力一杯押し始めた（羅１２）him-kkes-milki-sicakhass-ta

(40)すっかり置き換えられてしまったような気持ちだった（敦１７）wancen-hi pakkwu-e-noh-a-cin kibwun-i-ess-ta

(41)思い浮かべていた（道２６）hoysan-ha-nun kes-iess-ta

(42)自然に受け入れる（伊８０）cayenhe pat-a-tulin-ta

異なる格支配

(43)細い体で悲しさに耐えかねているように（廃９０）

ma-lun cheykyek-ulo sulpwum-ul cham-ki-e-lye-wuntusi

(44)手で撫でながら説明に取りかかった（窓１５）

son-ulo man-ci-myense-selmyeng-ul sicak-hayss-ta

(39)の場合は前項動詞の名詞形語尾(ki)＋後項動詞に対応する場合である。(40)の場合は日本語の「前項動詞＋後項動詞」が韓国語の「後項動詞＋前項動詞」になる場合である。(41)の場合は代動詞である「hata」と「漢字語」との合成の場合である。この場合が日本語の複合動詞に対応する韓国語の「漢字語＋する」の場合である。(42)の場合はいわゆる日本語の複合動詞に対応する典型的な韓国語の複合動詞である。これ以外にも対応する韓国語の表現には使役（はねのける⇨panpal-siki-ta）、受身（擦れ合う⇨machal-toy-ta ）、副詞（連れ立つ⇨hamkkey ）などといったように様々な表現に対応する。また日本語と韓国語との異なる格支配は日本語では「ニ」格を要求する他動詞が韓国語では前項動詞の格主導によって行われる。すなわち前項動詞が他動詞だったら「ヲ」格である「ul」で表される。例(43)と(44)のように「ニ」格が「ul:ヲ」格になるわけである。また「ニ乗り換える」「ニ乗り越える」でも「ヲ」格である「ul-kalata-ta」「ul-kukpokha-ta」になる。

6．終わりに

以上のように現代日本語の格支配を中心に韓国語の複合動詞と関連づけて調べてみた。本研究の考察から分かるように動詞と動詞の結合表現は非常に類似していることは否めない事実である。また、細部においては格支配権をはじめ、多くの面で相違点があることが分かった。このように日本語の格支配を中心に調べたが、不十分なところがあると

考えられる。しかし、逆に韓国語の複合動詞を中心に考察を行うと、今まで出てこなかった新しい見解が出て来る可能性は十分あると考えられる。本研究で考察できなかったところについては今後の課題にしたいと思う。

注

(注1)山本(1984)では結合価と格支配と関連させて述べている。本稿での「格支配」は必修格に限定した。

(注2)仁田（１９９３）では「格支配」を文の形成にあたった自ら表す動きや状態や関係の実現・完成のために、必要な共演成分の組合せを選択敵に要求する働きである。

(注3)塚本(1993)では主に語彙的複合動詞を韓国語の複合動詞と比較・対照している。

(注4)李(1994)では統語的複合動詞の設定基準について述べている。

参考文献

李　昰　洙(1994a)『教育学研究紀要』「統語的複合動詞に関する研究」40-2中四国教育学会

……(1994b)「現代日本語における複合動詞の形態・意味・統語的特質に関する研究ー韓国語の複合動詞との関連を中心にー」『郭永喆博士還暦記念論文集』日本語バンク

影山太郎(1984)Nebulae ' Three Types of Word Formation"10 osakagaidai L-c

……(1993)『文法と語形成』ひつじ書房

塚本秀樹(1993)「複合動詞と格支配ー日本語と朝鮮語の対照研究」『日本語の格をめぐって』くろしお出版

仁田義雄(1993)『日本語の格をめぐって』くろしお出版

山本清隆(1984)『都大論究』「複合動詞の格支配」国語学論説資料２１－３

用例出典

川端康成『伊豆の踊り子』（1989）日韓対訳文庫、三島由紀夫『金閣寺』(1966)集英社、『潮騒』(1990)日韓国対訳文庫、『熱帯樹』日韓対訳文庫(1991)、井上靖『敦煌』(1965)新潮社、原田康子『廃園』1976）角川書店、黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』(1984)三浦綾子『道ありき：青春編』(1976)新潮社、土居健郎『甘えの構造』(1966)弘文堂、辰濃和男『天声人語・人物編』(1993)朝日新聞、玄真健『幸運な日』(1982)大学書林、井伏鱒二『黒い雨』(1970)新潮文庫、李清俊『西便制』(1994)早川書店、松本清張『眼の壁』(1994)新潮文庫

ローマ字表記はYale System of Romanizationに基づいて、ハングルを転写した。